甲子夜話異聞

千津　敬紀

静山の祈り

（今日で、百日目である）

松浦静山は、自分に課せた日課が続いていることに満足した。

この日課を果たすことを思い立ったのには、理由がある。松浦静山は、平戸藩六万石ばかりの第九代藩主であった。息子のひろむ熙に代を譲って今は隠居の身の上である。まだまだ働き盛りなのに隠居を申し出て、これが許された。これにも静山なりに複雑な心の葛藤がある。

静山は、隠居してから、日々の思いや巷の様子を記録した。これが甲子夜話である。少藩の藩主では、物足りなさがあった。特に、平戸は、地勢的にも日本の西の果てである。

江戸城の将軍お目見えの時には、大名の溜まり場で雑談も交わされる。

「え、平戸ですか。それははるか遠方で、大変でござるな」

交わされる言葉が、大名の誰もが、平戸と聞いて、驚いた表情を示す。それは、もう日本ではない、まるで外地の印象である。そのような言葉を聞くと何か蔑まされたような気がした。

それとどうしても忘れられない言葉があった。老中は、気楽に述べたことであるが、静山にとっては、屈辱の言葉以外ではなかった。

「平戸の松浦党は、その昔、倭寇であったかな」

そう云いながら大きく笑った。それからこうも付け加えた。

「この鎖国の時代では、いくら松浦党でも手も足も出ないのではないか」

冗談にもそこまで言うかと、静山は、その老中の品格のなさに憤りを覚えたことがある。

（もし徳川幕府が、大陸と戦うことになれば、わが平戸藩も見直されるのだ）

平戸藩を揶揄した老中に向かって、今にも、声になりそうだった。

（こうなったら、老中になってみせる）
静山は、自分の才覚を信じていた。江戸城の溜まり場で言葉を交わす他藩の大名など、歯牙にも掛けなかった。大きな顔をしているが、頭は空洞のこの連中たちに自分の存在を認めさせなければならない。
静山は、老中になるための運動を欠かさなかった。幕閣への贈答など気を使った。でも、一向にその効果は現れなかった。
（疲れた）
静山は、このことで疲労困憊した。寝込んでしまった。
寝込んで考えたことは、隠居であった。幕府に仕える気が失せた。自分を幕閣にしない幕府に対する反発でもあった。幕府は、静山の若き隠居を渋った。これには静山も気をよくしたが、隠居の意思を撤回する気になれなかった。一年後、隠居が許された。
静山、四十六才の働き盛りのときである。

母の死と森本右近太夫

今、母が臨終間際に云った言葉を実行している。
母の枕元で、静山は尋ねた。
「何か最後にお願いがあれば何なりとおっしゃってくだされ」
顔色も失せた母が、少し考えるようであった。
「この母のために祈ってくだされ。毎日、毎日祈ってくだされ。一万日の回向をお願いできるか」
静山は、こ母の手を握り、
「必ずや」
と、その手を拝むようにして今生の別れにおける約束をした。
静山は、この約束を果たす上で、あることを思い出していた。過去に松浦家の家臣で、天竺に渡り、祇園精舎に父母のために仏体を寄進した者がいたことを聞いたことがある。
（それほどまでに仏教に帰依したとは）
どうもその人物のことが、妙に気になった。

毎日、母の位牌に向かっている静山の心には、このことが常によぎる。そうであるが、その人物を天竺まで駆り立てたものは何であろうかと疑問は残る。
（それほどまでして、天竺に駆り立てたものは父母の供養以外の目的はなかっただろうか）
それの答えは無い。そのもどかしさだけが残る。
（世が世なれば、自分も天竺に行くのに。天竺とはどういうところか）
静山は、そう思えば思うほど天竺に対する夢が膨らんでくる。
ところが、今、幕府は鎖国をしている。

カンボジアのシェムリアップにあるアンコールワットに墨書が残されている。アンコールワットは、今は世界遺産である。王宮であり仏教寺院でもある。
「寛永九年正月に初めてここに来る。生国日本、肥州の住人、藤原の朝臣森本右近太夫一房、御堂を心がけ、数千里の海上を渡り、一念の儀を念じ、生々世々娑婆寿世の思いを清める者なり。其のために仏四体を奉るものなり」
森本右近太夫一房は、母が亡くなり、浪人の父と暮らさなければならなくなった。父儀太夫一吉は、厳格だった。父には、熊本肥後藩の祖、加藤清正とともに加藤家を支えてきた自負というものが生きている。そこから抜け切れず、清正の子の代になって浪人した。というより、加藤家の将来を見限った。自分の子である一房のためにも新しい将来ある主君に仕えさせることが必要であった。一吉自身は、主家を裏切るということではなくて、加藤清正一代限りの忠義との思いが強かった。
加藤家は、清正の子忠弘の代に改易になった。一吉は、どちらかというと城造りで、清正に取り立てられてきた。
「この城の石垣では、地震のときには保たない」
秀吉が自分の隠居の住まいとして築城した伏見城のことを一吉から清正は聞いていた。地震が起きた時に、真っ先に駆けつけることができたのは、そのことを危惧していたからである。朝鮮の役で、秀吉の目付であった石田光成などの讒言により、秀吉の逆鱗を被り、謹慎の身の上にあったときである。この行動で許されることになった。
「石垣は、武将にとって、命以上のものである」
許された清正が、この時、喜んで一吉にそう語った。

「加藤家は細川家に受け継がれるが、そなたは、松浦家に仕官してもらいたい。その話は、既に松浦家当主天祥公しげ鎮のぶ信殿も承知である」
父一吉からの一房への意外な言葉であった。
「家康公の時代には、松浦家を対外交流の基地として、大いに活用してもらい、平戸は貿易拠点として繁栄しているが、今では逆に睨まれている。平戸から別の場所に拠点が移されるかもしれない」
父が何を云おうとしているのか、一房には、甚だ理解しがたいものがある。
「その話と、私の仕官が何か関係があるのですか」
それを聞いて、父一吉は、手に持つ扇子をばたばたとせわしく動かした。そして、天井を仰ぎ見た。

平戸の港は、活況を呈していた。時々、外見は日本人に見えても、日本語とは違う言葉を交わす人夫風の人たちが通り過ぎる。
一房には、すべてが新鮮である。東シナ海に繋がる大海原は、太陽の光を受けて、宝石のように輝いている。それは、一房の門出を賞賛しているようでもある。海を見下ろす小高い丘に平戸城が凛として聳えて見える。
松浦家の武士は、それを確かめると舟に乗りこむために必要な書類を渡してくれた。ここは、城ではない。松浦家から指定された、街の外れにあるお寺の一室である。
「主君は、今江戸にあって会えないが、これは密命である。くれぐれも身辺に注意することをお願いする。加藤家が改易されたように、この松浦家も目を附けられている。」
武士は、それだけ述べると、そそくさと立ち去ろうとした。そのときに、
「主君は清正殿を尊崇している。それがしは、主君の小姓をしていたのでよく存じている」
それを云うと、今までの険しい顔が、童顔の笑顔になった。
武士が立ち去ったあとの余韻が残る本堂で、あるものに目が止まった。仏体である。小さいながらも品がある。一房は、あることを思いついた。父に頼まれた以外のことである。松浦家からの特命以外のことである。仏体二体を手に入れた。一房には、自分自身の望みがあった。そのため父からの依頼を断らなかったのである。

日本人町の女

「何と繁華なことか」
思わず声になってしまった。
「もしや肥後のお方でしょうか」
一房が振り返ると、そこに一人の女が少し不安そうに立ちすくんでいる。一房も急に呼び止められたために、やはり不安で声を出さずにその女をしばし眺めるよりほかなかった。
「何も怪しいものではありません。その腰の人形は、肥後で作られたものではないかと余りになつかしく、思わず声をかけてしまったのです」
一房が、肥後から来たと分かると、その女の表情が急に明るくなったように思えた。女の両親は、肥後の領主であった小西行長の家臣であった。関ヶ原の戦いで、西軍側であった小西行長が没落したが、交易に携わっていたのでその伝手を頼ってこの安南に逃げてきた。その後、両親が亡くなって、今は、交易の仕事をしている兄と暮らしている。兄は、肥後で生まれているが、その女は、このホイアンで生まれたということである。
「一度、故国である日本、両親が住んでいたという肥後に行ってみたいと思います。兄も同じ気持ちです。兄は、肥後で生まれていますが、幼かったのであまり記憶がありません。その人形は、両親が大事にしていたものです」
そう言うと、是非、家に来て、兄に会って欲しいという。
「声を掛けたのは、確かに肥後のお方かと思ったことも確かですが、似ているのです。兄に面影が」
女は、もう既に遠い過去から知っているような親しみのある物言いに変わっていた。

（確かに似ている）
一房は、自分たちが双子の兄弟としても十分であるようだと一瞬思った。
店は、活気を呈していた。これから船に積み込む品が運び込まれている。女の兄なる者が、誰彼となく親しく喋っている。ただ喋っているのではなくて、的確に指示を与えているように見えた。それは、武士とは違って、形には捉われない自由な躍

動感に満ち満ちていた。
一房は、父を思い出していた。主君を失い、浪人の身で今は無聊を囲っている。戦いの世には、城も重要であったが、徳川幕府が安泰すると、城を危険なものとみなして壊すようになった。城造りの技術ある父など用無しの時代である。
父が、庭に佇んでいる姿を何度も見たことがある。
（父を今支えているのは何だろうか）
父のそういう姿を見るたびに、何度も疑念が生じた。一房が、朱印船に乗る決心をしたのもそういう疑念からである。
（それに比べて、ここには、自由な明るさがある）
ホンアンのどこまでも青く広々とした空を眺めると、心と体が吸い込まれるような気がした。
「祇園精舎へ行くには、どうすればよいのでしょうか」
一房は、いくらか商売の事やら肥後のことを談笑した後に、このことを切り出した。この兄が異常なくらいに一房を歓待してくれることには、父母が同じ肥後出身であることで疑いを挟まなかったことによる。ところが談笑の中で、気にかかることがあった。
「父や母の国である日本に、何とか父母を戻してやりたい」
兄の敬太郎が話すには、それが父の遺言でもあったそうだ。母は、ここの世界にすぐに慣れたが、父は、過去にこだわったそうだ。
そう言いながら、敬太郎が奥の方から持ってきたものを見た時に、一房の胸に、激しい衝撃が走った。
「父が、大事にしていた刀です」
「お父上は、武士をきっぱりとは棄てなかったのですか。主君小西行長殿が没しても武士というものにこだわったのですか」
母は、父の遺志が私に伝わることを恐れたようです。この商売は、その後、母が切り開いたものです。ところが働き詰めで病を得て、亡くなりました」
一房は、じっと聞いていて、目を妹の阿知に向けた。阿知も母を思い出しているのか、少しうなだれて目が潤んでいるようであった。
「日本に戻ったらいけません。ここで幸せになりなさい」
これが母の遺言であったと、敬太郎は、最後に附け加えた。

祇園精舎

「それはまるで現実にはあり得ないと思われるほどの建物である。そこには、仏陀が今も生きている」

その建造物があるところは、ここからはまだまだ遠い。でも平戸を出てからこのホイアンに来るまで、約四十日近くかかっている。決して長い日数とは思わなかった。

（異国の風景というものは、実に心地よい刺激をもたらしてくれる）

今、この地の古老から、聖地までは遠いと言われて、今までの航海においての港の街の活気を思い出していた。寧ろ、遠いことが好ましいように思われてきた。あちこち見聞ができるからである。

「祇園精舎の鐘の音。諸行無常の響きあり。勝者、必衰の理をあらわす」

その言葉が、何度も何度も自然と一房の心に浮かんだ。

「早速、ビニョールへ行く交易船を探さなければならない」

夕暮れの川辺を歩く一房は、表情も明るく阿知を振り返った。阿知は、声を出さずに、黙ったままで頷くだけである。

河には、篝火がいくつも焚かれている。その下には、魚を捕る網が置かれている。火の明りに集まってくる魚を捕るためである。阿知は、立ち止まって、煌々とした篝火の明りをじっと見つめたままだ。

「どうしたのだ」

阿知が、何か呆然としている様子なので、少し気になった。暗がりでも、阿知のうなじは、異様に白く思われた。

「昔を思い出したのです。母によく連れられて、ここに来た時のことを思い出すと、・・・・」

河面には、篝火の明りが、ゆらゆらと揺れている。消えては輝き、一瞬消えたかと思えば、もう光り輝いている。見飽きない。それを阿知は、じっと見ている。それに連られるように、一房もそれに目を向けている。それは、今まで見たことのないようなまるで妖艶な幻影のように思われて、一房も我を忘れて見続けていた。

ただ、母の思い出に何か深いものがあるのか、一房には、阿知の表情の中に言いようのない翳りが強く感じられた。

一房は、自分の使命も忘れてはいない。父の願いとは別の松浦家から託された密命である。この密命を果たすために、ホンアン滞在中に、この街を精力的に巡った。ホンアンの北に位置する王宮のあるフエにも足を延ばした。一房の来る前に、このフエを尋ねて数人の日本人が来たということである。

「松浦藩に関係する者は、今まで見かけなかったかということも聞かれました」

「なに、その商人たちは、幕府の手のものか」

一房は、驚いて、きっと通訳を睨むような目になった。通訳が一房の態度に恐れをなしたので、少し穏やかな口調に戻した。

「その者たちは、その後、どうしたか知らないか。まだ、この地に残っているのか」

「なんでもこれから更に南の地に出かける。その一人が、日本に無事戻れるかなと云ったら、もう一人が、縁起でもないことをいうなと叱っていました」

一房は、それを聞いて、旅立ちを早くしなければと急いでフエからホンアンに戻ることにした。

夕暮れ時に、川辺に立っていた。明朝の出立の別れに敬太郎の家に赴いた帰りである。魚を集める篝火が燃えている。その篝火をじっと見ていると、数日前のことが思いだされた。

（阿知さん）

篝火の中に、その顔が燃えるように揺らめいている。思わず心の中で、言葉になってしまった。

振り返ると、そこに阿知が立っている。一房は、夢ではないかと疑った。幻ではないかと、じっと確かめるような目で眺め続けた。

ふと手と手が触れ合った。お互いにその手を強く握りしめた。その時に、初めて阿知は、一房の顔に目を向けた。そして、何かを言いたそうであった。でも、阿知は、何も語らずに目を再び、篝火の方に向けた。その横顔を見たときに一瞬たじろいだ。一房には、この世のものとは思えないほどの青白さであった。

（祇園精舎の鐘の音。諸行無常の響きあり）

このときこの言葉とともに、一房は、遠くで鐘が鳴っているような錯覚に捉われた。

鐘の音

朝日が煌々として、昇るのを見ている。体が、一瞬、強張るのを一房は覚えた。それほど感動的である。朝日は、紅く燃えている。それが、左右対称である寺院の真ん中から昇ってくる。

この地に来ることができて、一房の心は確かに喜びで一杯であるが、意外と心が冷静なのに自分でも驚いている。ここへ来るまでのことを考えると、よく生きながらえて来れたものと今更ながら思う。二カ月もあればと思ったが、一月も余分に掛っている。船が途中で襲われたのだ。

確かに海賊の首領は、一房には日本人のように思われた。目と目があった時に、直感的にそう思った。一房に、海賊の手下の一人が声を掛けてきた。日本語である。でも容貌からは、日本人ではないことは確かである。

「お前は、日本人だな。どこへ行くつもりなのか」

それに正直に答えるべきか迷った。答えようによっては、危害が加えられるのではないかと思われた。一房は、首領の方へ眼を向けた。

「ビニョールへ」

「ビニョールならもうすぐだ。歩いて行ける」

これを聞いて、少し安心した。船を失っても、そんなに影響がないと思われたからである。その海賊の手下は、首領と何か話している。そのあとに、また。一房のところに戻ってきた。

「お前は、日本の武士だろう。徳川幕府の手のものか」

「お前たちの首領は、日本人か」

一房の心の奥深くあったものが、意図せずに思わず声になってしまった。

「そんなことはどうでもよい。質問に答えろ」

急に、表情が強張って、威圧的な態度になった。そのような態度に対して、一房も素直になれなかった。

「そんなことを知ってどうする」

一房も、本当のことを言って、これが幕府の手の者に伝わらないとも限らない。

（やっとここまできたのに。もうすぐ聖地なのだ）

そう思って、
「そうだ徳川幕府の者だ」
という言葉が、口から出た。そう言った方が、助かるような気がしたからである。
「腰にぶら下げている焼き物は、どうしたのか」
これには、驚いてしまった。余りに意外な質問であったからである。この陶器の人形は、ホンアンで阿知がくれたものである。
あの川辺の最後の別れの時に、
「帰ってきてくださいとは、言いません。ただ、忘れないでいてください」
そう言って、渡されたものである。その言葉に、一房は、愛とかいうものを超える人間の根源的な慟哭のような気がして、今でも、その言葉が脳裏に焼き付いている。
「忘れないでください」
その言葉の阿知の顔が、今でも瞼に浮かぶ。

「これは、拾ったのだ」それから、取り繕うように、
「とても気に入ったから、持っているのだ」
と、一房は、嘘の念を押した。
「どこで、拾ったのだ」
思いがけない声が、頭上から飛んできた。船の甲板に立つ首領である。
遂に正体を現したと一房は思った。一房自身も、一体、何者なのか、この人物に興味が出てきた。
「どこで拾ったか忘れた。それより、そなたは、日本人なのか」
一房の問いを一蹴して、
「ホンアンではないのか」
と、執拗である。
ホンアンという言葉を聞いて、咄嗟に一房は、阿知の顔を思い浮かべた。
ここが天竺の祇園精舎であると、アンコールワットを見ながら、その荘厳な建物に目を見張った。
（ここが聖地である）
改めて自分に言い聞かせた。早速、仏体二体を取りだした。これは、父から頼まれ

たものである。一体は、父が仕えた清正殿の仏である。もう一体は、清正殿が仕えた太閤関白秀吉殿の仏である。

「これで何か心の重荷を下ろしたような気がする」

父が、一房にこの二つの仏体を託すときに、つぶやいた言葉である。太閤秀吉の天下から徳川家康の天下に移行するなかで、清正殿は、太閤殿下の遺子秀頼の命を守らなければならなかった。そのために一方では、豊臣家遺臣として目を付けられている清正殿自身の安泰を計る必要があった。その心労で亡くなった。太閤殿下の遺子秀頼が亡ばされる六年前のことである。

（豊臣家の滅亡を目のあたりにしなかったことが、清正殿にとってせめてもの幸いだった）

そう思いながら、清正の仏体を眺め、手で優しく撫でた。それから、もう一つの太閤の仏体を眺めて、

（やはり、豊臣家の滅亡を知らずに済んだ。そして、今、太閤秀吉が果たせなかった海外派兵以上の遠い国に来ている）

その太閤の仏体も優しく撫でた。一房は、京の太閤の墓が家康によって破壊されたことを知っている。

（ここは聖地である。太閤様も今の世が自分の世でなくても、ここでなら成仏できる）

一房は、確信した。今、父がこの二体を託したことを理解した。この聖地なら、必ず成仏できる。父は、ここなら二体とも仏になることができると確信していたのである。

それから父から託された二体の他に、自分が調達した二体も寺院に奉納した。

今、寺院に記録を書いている。自分が頼まれた使命を果たしたことを書きつけておかなければならない。でも、本当のことを書くことはできない。仏体二体の正体を記録に留めることはできない。

そのため、仏体四体を亡き母と父の現世の功徳を祈って、ここに納めるものであることにした。

（亡き母とそして父の二人なのに、仏体四体を納めたのを不思議に思うものはおそらくいないだろう）

この時にあって、仏体二体が、豊臣秀吉と加藤清正のものと鮮明にして、このことが日本に伝われば松浦藩に大きな害を及ぼすだろう。
（それではまずい）
でも、心の片隅では、本当のことを書き記すべきではないか。例えそうしても、はるか日本より離れた地である。
（そんなことに目くじらを立てられることは、まずないのではないだろうか）
一方では、そう思ったが、今は、自分のことをはっきり書きとめる必要があったので、敢えて、父の現世の安寧と亡き母の冥界での成仏のためにと仏体四体を納めるものなりと柱に記した。
書き記してから、一つの肩の荷が下りたと思った。

渡航禁止

ホイアンに戻ると、何か喧騒であるような気がした。早速日本人町へ行くと、立札に落書の張り紙があった。
「海外への渡航は禁じられることになりそうである。今後数年以内に帰国しないならば、もう帰れなくなる。こんな馬鹿なことが許されてよいものだろうか」
これを読んで、一房は、ついに心配していたことが来てしまったと思った。
早速、阿知の家に向かった。
「一房殿ではありませんか」
目ざとく見つけて出てきたのは、兄の敬太郎であった。
「ようご無事で戻られた」
中へ招じいれると、開口一番、
「大変なことになりそうです」
と、敬太郎は、あの落書のとおりだと今の商売が立ち行かなくなることを嘆いた。
交易船が日本から入って来なくなる。
敬太郎は、興奮気味であった。半ば感情で今までの思いを一房にぶつけるようであった。一房には、興奮した敬太郎のことよりも、ここに阿知がいないのが先程から気になっていた。
「このさい、日本の地を踏んでもよいとも阿知と話している」

それを聞くと、一房の気持ちが大きく揺らぐのを覚えた。
「阿知殿は、それに同意しているのですか」
「父母を故国に戻すことができる。それに私たちにとって、父母の国を見ることは、長年の念願だったのです」
「でも、一旦日本に戻れば、もうこのホンアンに帰ってくることはできない。あの落書のとおりとなれば、そういうことは十分予想される。それでもよろしいのですか」
「意外なことをおっしゃる。一房殿はてっきり賛成してくれるものと思っていましたのに」
それから、一房が無事ホイアンに戻ってきたら、日本に戻ることを相談しようとも考えていたとも付け加えた。一旦、この地を離れたらもうここに戻らないことは覚悟の上である。
「ところで阿知殿は」
「そう言えば、阿知は戻って来ないな。遅いな、どこへ行ったのやら。ちょっと出かけていくと言ったのに。船着き場かもしれない」
敬太郎は、一房から目を外し、何かを思うような表情になった。
一房は表に出た。そして船着き場に向かった。既に暮れなずむ頃であった。
阿知は、そこにいた。すぐに声を掛けなかった。何か呆然として、それはもうこの世の人とは思われないよう印象を受けたからである。
一房を見つけると、その表情が崩れた。
「一房様」
か弱く一声そういうと、そこに泣き崩れてしまった。篝火が焚かれている川面には、炎がゆらゆらと揺れていた。それは、ここで別れるときに見た情景と同じだった。そこに大きな船が、通り過ぎようとしていた。一房は、そこで驚きの声をあげそうになった。
（確かあの男）
甲板でこちらを見ている男は、瞬間的であったが、海賊の首領の顔に似ていた。

一房の決意

一房は、敬太郎が自分を頼りに日本への帰国を果たそうとしていることを負担に思った。敬太郎の期待が膨らまないうちに、自分の決意を述べた方が誰にも迷惑をかけないと考えた。それと兄の敬太郎は、妹の阿知が一房といっしょになってくれればとも考えているように思えた。

（でもそうすることができない）

一房は、苦悩した。

この地を訪れようと決心したときにすべてを捨てようと思ったのである。松浦藩も父もそして日本を捨てようと決意したからこそ、この地に来ることができたのである。

（また、あの聖地に戻ろう。そして仏に仕えよう）

こういう気分が時々心を支配する一房にとって、とても阿知と一緒になって幸せになる自信など湧いてこない。一房は、阿知のことを慕えば慕うほどいっしょになれないと思うのである。愛すれば愛するほどそういう気持ちで一杯になってしまう。

（このような自分が、阿知と暮らせば、阿知の人生を壊してしまう）

一房は、この地から逃げたくなった。阿知に逢いたいと気持ちに逆らえず戻ってきたのに、今は、早くこの地を去らなければならないと思うのである。

「敬太郎殿、こちらからお願いがある」

一房は、胸の内を打ち明けた。

「これを日本に届けてほしい」

一房が、渡そうとしたものは、いままでこちらで調べた書き物とアンコールワットの絵図面である。驚きの表情を敬太郎は、隠せない。

「一房殿は、日本へ戻らないのですか。どうするのですか」

「戻らない。日本を離れたときからそう決心している」

「でもそうだと、藩から頼まれたことを果たすことをできないのではありませんか。お父上の立場もあるのでは」

敬太郎は、少し非難めいた口調になったことに気が付いた。

「すいません。少し興奮したものですから」

一房は、別に気分を害した体でもなく、静かな口調で話し出した。

「このことを引き受けたときに、私の心の中を父は既に察知していたようである」

父は、この渡航の件を一房なら受けるだろうと考えて、私に松浦藩の仕官の話を

持ち出したのである。
「父は、私がこの地で亡くなったとして、書き物は誰かに託すだろうと、そう考えている」
そう述べてから、続けて述べたことには、余りの意外なことなので、敬太郎は驚くことを越して呆然となった。

「日本に戻ったら私で通してもらいたい」
仮にそうであっても、そんなことが通用するのかという思いで、敬太郎の心の中は一杯であった。あまりの唐突な提案なので、何を聞いていいかも見つからない。そんなことはできるわけがないという思いだけである。
「でもそうしなければ、日本に戻ることは不可能に近いでしょう。そうすることが、阿知殿と日本の地を踏むことの最も近道になります」
この時期に急いで一房を松浦藩がこの地に派遣したのも、幕府の動向を察知したためである。幕府は、近いうちにキリシタン教徒の取り締まりから、海外の往来を禁止する方向である。これによって、交易も止められてしまえば、今まで交易によって莫大な恩恵を被ってきた松浦藩にとって、余りにも影響が大きい。
「幸いなことに、松浦藩で自分の顔を知っている者は、一人しかいない。それももう一年前のほんの短い一時の間である」
そう言いながら、敬太郎の顔をまじまじと見ている。見れば見るほど一房とよく似ている。これでは、父も疑わないのではないかと思った。

数日後、敬太郎が一房の宿屋を訪ねてきた。
敬太郎の顔は冴えなかった。それを見て、やはり無理かなと一瞬そういう思いに捉われた。ところが、敬太郎は意外なことを話し出した。

阿知の心

「実は、日本に渡るのに一房殿がもし承知してくれるならば、阿知といっしょになってくれたらと考えていた。でも、一房殿は戻らないという。それで困ってしまった」

敬太郎の話すことを聞きながら、
（もしそうすることができるなら、心からそうしたいと思っている。その方が楽しいではないか。楽ではないか）
と、心の中では憤りのように声になりそうになる。でも、それが沸き立てば立つほど、やはり、それ以上の強く否定する何かが一房を支配する。そういう楽しさを時折感じる生活の中で、ある空虚しさをいつも感じて生きてゆかなければならない。
「一房殿、私は決心した。日本に渡ろうかと思います。それに一房殿の申し出のとおりに、一房殿に成りきって生きてゆきたい。その代わりに阿知を」
そう言いながら、
「実は、迷っています。阿知を連れていくべきかそれともこの地に留まさせるべきか。阿知は、一房殿に伴われて日本に渡りたかったのです」
そう言われて、心が動揺しない一房ではない。でも、そのことを打ち明けられても、何と答えてよいか分らなくなっている。沈黙を続ける以外、どうしようもなかった。
「今、阿知も迷っています。一房殿が日本に渡らないことを話したら、泣き出した。阿知は、私とも別れたくない。そしてあなたとも別れたくないのです。どうか、一房殿、阿知の気持ちも察してやってください」
一房は、一度決心した心が揺らぐのを覚えた。

「老中、老中、大変です」
けたたましい声である。老中松浦静山は、うたた寝からはっとした。
「一体、何事か」
「平戸の松浦藩が、国禁を犯しました」
「何、今何と申した。松浦藩だと。平戸だと」
「そうです。松浦藩です。平戸の松浦藩です。老中が藩主の松浦藩です」
老中松浦静山にとって、念願の老中就任から今までの間、順風漫帆であった。やることなすことが、将軍や諸大名の賞賛を集めた。老中になって、その才を如何なく発揮した。
（押しも押されぬ名老中や）
静山は、自画自賛で有頂天になっていた。
「何かの間違いでないか。どういうことだ」

「藩士の者で、森本右近太夫一房と名乗る者が遠く天竺に渡り、帰国したところを幕府の役人に捕まったそうです」
「何と。そんな馬鹿なことが」
静山は、それを聞くとやっと手に入れた老中の地位が、手から擦り抜けて落ちていくような気がした。それから腰が砕けてそこにしゃがみ込んでしまった。
「既に、このことは将軍にも他の老中たちにも伝えられており、お家断絶はもちろんのこと、藩主の責任、それも老中であることから切腹は免れません」
「ああ、ああ、何たることか。これが長年の念願であちこちへの付け届けでようやく手に入れた地位なのに、とんだ笑い物になってしまう。今となっては、こんなものにならなければよかった」
嘆きは、尋常ではない。
「森本右近太夫一房。どこかで聞いたような名である。そうだ。でも可笑しい。確か、一房は、今の時代の人物ではない」
それから、
「嵌められたのだ。老中を失脚させるために誰かが仕組んだのだ」
と、その大きな怒りの声で叫んだ。

戸外で風が騒ぐ。今夜は、隅田川から吹いてく風が戸を叩くような気がした。
その音で、思わず松浦静山は、うたた寝から目が覚めた。
（ああ眠ってしまったのだ。夢であったのか。ああ、夢でよかった。老中などにならずによかったのだ。でも、今のは果たしてどこまでが夢であったのか）
甲子夜話を書いている間に、眠ってしまったようだ。何か夢を見ていたみたいだった。
（天祥公と夜話の相手をしたのは、果たして晩年の一房本人であったのかどうか）

日本に戻る船の出発日が近づいていた。今後近いうちに、渡航禁止の令が出されるという噂が広まって、安南の地を去る人で船はすでに予約で一杯になっている。一房も帰国するならば、この船でしかないと思いは強い。この機会を失えば、例え、帰国したいと思っても、帰国が不可能になる。そういう危惧がある。あれからどちらとも決心ができずに無為に時を過ごしている。
（もし阿知が逢いにきたら）

心の底にある思いが、一房の足をホンアンの日本人町の一角に止めさせた。
ところが阿知は一房の前に姿を現わさなかった。その代わり、数日して兄の敬太郎が来た。慌てている様子であった。
「一房殿、お願いがあります」
開口一番の言葉である。息を堰切っていた。敬太郎の表情に焦りとともに真剣な異様なものを感じた。一房も、思わず前のめりになった。
「阿知のもとに昔の許婚者が現れたのです。一旦は、この地を去ってそれから行方不明でした。おそらく亡くなったものと思っていました。それが驚いたことに生きていたのです。驚いたのは、私以上に阿知だと思います」
阿知は、一房の決意を知ってから、生きる元気を失った。そこに昔、慕い合った男が戻ってきたのである。阿知は、一旦はその男に傾きかけた。一房への望みが絶たれたからである。でもすぐに、自分の本心を否応なく知った。今ではその男への愛を失っていた。
「一房殿、後生ですから、阿知を救ってやってください。日本に一緒に戻ってください。阿知には、その男への愛はもうありません。未練などもありません。一房殿しか阿知を救えません」
敬太郎の嘆願を聞きながら、一房には、それにどう応えていくべきか自分の意志さえ分からなくなっていた。このような状態で阿知を連れて逃げても、とても幸せになることはできるかどうか全く自信がなかった。
「敬太郎殿、自分はこの世を捨てた。これからは、野垂れ死にしても構わないと思っている。この私が阿知殿を幸せにするなどとてもできない」
そう言いながら、あの海賊の首領の顔を思い浮かべた。
（あの男が阿知を幸せにできるのか。いや、それは無理だろう。阿知は、女の本能でそのことを感じている）
そう思いながらも、かといって自分が救ってやれないことを考えると虚しさ、やりきれなさを覚えた。
「敬太郎殿、阿知殿を連れていっしょに日本に渡るのが最善の道です。あなたたちの両親の国の地を踏み、菩提を弔うことができます」
「そうならば、何故阿知のためにいっしょに日本に戻っていただけないのですか。

あの男といっしょになれば必ず不幸になります。それが分かっていて何故、阿知を救ってやらないのですか。どうか阿知といっしょに日本に戻ってください。どうかお願いします」

一房には、阿知を幸せにはできないが、救ってやりたいと思う気持ちは強くある。思わず、首を縦に振っていた。そして、目を敬太郎から逸らした。ホイアンの町の陽光は今日も明るい。この明るさで、一房の気持ちも少し救われた。

最後の時

その約束の出航の日、一房は、未だ現れない。それに阿知も敬太郎と同行していない。

「先に行って。後で追い付くから」

阿知の言葉であった。敬太郎は身の廻り品を背負いながら、去る家をしみじみ眺めている。

「ああ今日で終わりなんだな。この日本人町も一人去り二人去りでどんどん寂れていくのではないか。そして廃墟となっていく」

敬太郎の脳裏を巡るのは、幼い日々の両親と過ごした日々である。この地で、日本の習慣で生活して、外地にありながらも日本人であった。敬太郎も阿知も二世であるが、日本人同士で付き合い、日本人の祭祀を行い、日本食を食べた。

「さあ阿知。父母の国、日本の父を踏むのだ」

慣れた地を去る一抹の寂しさを振り払うように声は快活であった。

ところが、阿知が現れない。船の出航時刻は迫っている。敬太郎は、焦った。それに一房も一向に姿を見せない。ここで、敬太郎は、あっと気が付いた。

（もともと一房殿は、日本に戻る気は、なかったのだ。阿知を助けるためなのだ）

それにしても、阿知はどうしたのだ）

このまま、敬太郎は、阿知を置いてこの地を去ることなどできようがない。ずっと阿知とは、いっしょに生きてきた。両親が亡くなってからも、助け合って生きてきた。阿知の身の上が不明のままでは、とても一人で日本になど渡れるものではない。

（あの男だ。あの男が阿知を拘束しているのだ。助けなければ）

敬太郎は、急いで船から下りようとした。そのとき、思いがけない光景を見た。下りようとした足が止まってしまった。向こうから、阿知が船に向かってくるではないか。その横には、あの男が寄り添っている。

その思いがけない光景に驚愕の心を持って遠巻きに見ている人物がいる。一房である。一房は、阿知のことが心配であった。なんとか日本行きの船に敬太郎と一緒に乗ってくれればと思っていたが、一抹の不安が残って、最後の時を遠くから確認したかったのである。

（これが、阿知を見る最後の日となるだろう）

そういう覚悟の思いもあった。

「阿知、どうしたのだ。早く、早く。船が出る時刻だ」

敬太郎は、船上から呼びかけた。

阿知は、船上を見回すようにしていた。そこには、一房がいない。

敬太郎は、阿知が声を出さないことを願った。下手なことを言うと、阿知の身の上に危険が振りかかるかもしれない。阿知は、男と何か頻りに話している。話している最中は、興奮気味であったが、話し終えた後は、何か虚脱状態で呆然としていた。

「お兄さん。行って。私はここに残ることにしたの。だから、行って。お願いだから、行って」

そう言いながら、阿知の声は、半ば震えていた。泣き声に変わっていた。

「お願いだから、行って」

敬太郎は、その泣き声で阿知の本心を知った。

（何とか、あの男から阿知を救わなければ）

船から下りて、阿知を奪おうとした。

「お兄様。来ては行けない。殺される。来ちゃいけない」

その時、男にぶつかってきた別の男がいた。男が、倒れている間に、阿知を抱きかかえるようにして、船の敬太郎のもとに連れていった。

「一房殿」

阿知も敬太郎もことの意外性に驚いている。

「さあ早く、兄のもとへ。私もすぐに行きます」

一房は、阿知を敬太郎に託すと、また戻って、阿知を奪い返そうとしている男と向き合った。男は、刀を抜いている。

「何故、刺さなかった」

「あなたは私を助けてくれた。あの海賊襲撃のとき、最初は殺そうとしていたのに、

最後は命を奪わなかった」
二人の問答はこれだけでじっと向かい合ったままだ。
船は、ゆっくりと桟橋を離れていく。
「一房様、一房様・・・」
悲痛な阿知の泣き声だけが虚しく南海に響き渡り、とろけるような海風とともに消えていった。

「それが、一房殿を見た最期でした」
敬太郎は、今、松浦藩主天祥公鎮信と向き合っている。蝋燭の灯明がゆらゆらと揺れて、二人の顔をほの暗く写し出している。
「そうか」
ため息をつくような感じがした。
「ここまでしてくれたのが、すべては無為になってしまった」
一房が調査した書き物を手にしながらの天祥公の言葉である。さらに自分に言い聞かせるようにつぶやいた。
「松浦藩の夢は終わった。まさか交易の道まで閉ざされるとは・・・・・」
それは、為政者としての立場からの落胆でもあったし、人生そのものの黄昏を感じているようでもあった。それから、次の言葉まで、大分間があった。
「西国の果ての外様の小藩として、これからひっそりびくびくしながら生きていかなければならない。敬太郎殿、そちが住んでいたホイアンにでも行ってみたいな」
その言葉で、ホイアンが、敬太郎の瞼に浮かんだ。阿知と楽しく遊んだ碧く広がる空と海のホイアンの日本人町である。

静山は、一房のことを甲子夜話に詳しく書き留めたいと思いながら、結局余り筆が進まなかった。
「今子孫吾中にあり」
最後に、簡潔に記した。調べようとすれば事の詳細がわかるけれども、一房が渡航した時代は、鎖国を巡る微妙な時でもあったので、敢えてそれを止めた。
（この件に関しては、真実は知らない方がよい。というより、真実はいくら調べようが到底分かることはない。ただ、帰国の時に、女がいたとは聞いている。妻とは

違うようなことである。可笑しなことだ）

隠居の下屋敷のあるところは隅田川が近い。時折、海鳴りのような音がきこえてくることがある。今日も、先ほどからその音が聞こえている。

（明日は、別のことを書かなければ。それにしても老中のことは夢であるが、あれは夢か現か）

いそいそと、静山は、寝床に潜り込んだ。

千津　敬紀

一九五十年（昭和25年）生まれ。

平成二十一年「遠い海の風」で福井新進文学賞、昨年「遣唐大使道真」、本年「甲子夜話異聞」を銀華賞に応募、その他「豊臣女人異説」「功名夢一場」などの歴史小説を執筆。主に人物の歴史に感情のフィクションにより真実に迫ることを意図している。「甲子夜話異聞」は徳川初期の時代に実際にカンボジア・アンコールワットに渡った人物を描いた。渡航の真意は一体何だったのか。